

ニコニコ共和国

A「いよいよ東北新幹線が開通するな。」

B「そうだな、開業前に大きいキャンペーンすれば必ず集客に繋がるらしいが、ここの所全て失敗していて案がなければ広告に使う予算もないな。」

A「そうだな、夏のイベントを考えなけりゃいけねえが。こりゃ外部の血を入れて新しい意見を聞いてみるっていうのはどうだ？」

B「そうするか。」

西「と言う事で今回皆さんの町のお手伝いと言いますか町おこしプロジェクトのためにこちらの観光協会に大阪からやってきた西と申します。よろしくお願ひ致します。」

A「先生様ええとこへきた、とりあえず一杯。」

西「いえ、私は下戸で。」

A「そんなこと言わず、ちょっと一杯だけでも。」

西「いえ、私は至って不調法で。」

鈴「けっ、田舎の酒は不味くて飲めねえって事だよ。」

A「鈴木さんそりゃいいすぎだぜ。」

鈴「そうに決まってらあ、大体俺はこんな外部の血を入れる事に反対なんだよ。こんな都会の奴が田舎の事なんてこれっぽっちもわかつちゃいねえんだから。」

西「そんな事ないですよ。今でこそ大阪に住んでますが、私の先祖をたどれば二本松出身の下級武士やったんです。私は相撲が好きで残念ながら強くなかったのですぐ引退して去年まで相撲の行司をやってたんです。それが親の会社を継ぐことになったんです。そして、今回お話を頂きご先祖様への恩返しのもりもあってこの仕事をお受けしたんです。」

A「先生様もとは相撲の行司だってよ。行司ってどんな仕事するだ？」

西「テレビなんかでご覧になってる相撲の審判はもちろんですが、一番大変なのが場所前に取組を決める事ですね。所で今まではどんなイベントをされてきたのですか？」

A「夏の仮装盆踊り、これは毎年沢山来てくれるんだけど、他に家族連れで来てほしいからヒマラヤ大通りを歩行者天国にして野外映画、花火大会、子供ディスコ大会なんかもやったか。お客さんはある程度来てくれるんだが、継続的な集客には繋がらないんだ。他にも色々考えたが万策尽きて、先生様にお願いに上がった。」

西「そうですか、ありがとうございます。ここは温泉町なんですけど皆さんやるのが映画やディスコみたいに新しい方に目が向いてますね、ここは発想を転換して田舎の良さを生かしていく集客の仕方を考えてみませんか？」

A「例えば？」

西「例えば、自然と戯れたり、温泉を使ったイベントなんかはいかがでしょう？」

鈴「ほれみろ。そんなありきたり案とっくに出てるわ。わしらを田舎もんとばかにしとるだ。これじゃあシティーボーイやシティーガールが来るわけねえ。」

B「おいてえへんだ、土湯温泉が町おこしに大々的に『土湯夏休みファミリー村』ちゅうのを作るらしいぞ。」

A「そりゃえええこと考えよったな。こりゃうちの出る幕はねえな。」

木「(酒を飲みほして) 国だな。」

西「びっくりした、あなたどちら様ですか？」

A「お前木村さんつってな、この岳温泉ではちょっとした有名人よ、あんた行司言うたけど、この木村さんは長年、地域のワンパク相撲の行司をしてた人だ。」

西「そうなんですか、ところで木村さんなんておっしゃったんですか？」

木「(お酒飲み干して) 国だ。」

西「へえ？」

木「国作るべ。」

西「いきなり何言うたはるんですか？国なんて作れるわけないでしょう。」

A「さすが木村さんだ。向こうが村ならそれより大きい事せんと勝てんがや。考える事がちがうな。」

西「落ち着いて下さい。ここは日本なんですよ、国なんて作れるわけじゃないじゃないですか。大体国なんて作れないですよ皆さん。大学生の飲み会のノリで決めないで下さい。皆さんもあるでしょ、深夜書いたラブレターを翌朝読み直したら恥ずかしい事、それと一緒にですよ。」

A「いや、そんな事ねえ、これは妙案だ。ちょうど井上ひさしさんのキリキリ人が流行ってるからな、おもしれえでねえか。んじゃ国の名前何にする？」

木「(酒を飲み干して) ニコニコ共和国。」

西「はい？」

木「ニコニコ共和国。」

西「そんなふざけた名前にしてどうするんですか？」

A「さすが木村さんだ！吉里吉里人ともかかっている。」

西「どういうことですか？」

A「おめえ大阪人なのに洒落のわからん奴だな。吉里吉里とニコニコがかかっているだよ。ここでわらわなきやもう笑うとこねえよ。」

西「何言うてるんですか。他の案を考えましょう。」

A「いや、これで行こう。それではニコニコ共和国を建国します。建国の父、木村さんを初代大統領としましょ、観光協会の皆様も異議ございませんか？」

全員「異議なし。」

西「あの～異議あるんですけど～」

A「では日本から独立、ニコニコ共和国建国万歳。んじゃちょっとマスコミに取材きてもらうようお願いしとくから今日は解散。」

西「ちょっと、そんなんうまくいくはずないじゃないですかって皆さん～」

とお酒の勢いもあってまだ中身を全く決めず日本から独立し「ニコニコ共和国」建国を進めます。西さんも冗談かと思っただけでしたがとんとん拍子に進みます。たった一枚の垂れ幕を準備し4月28日本当に独立宣言、面白かった地元の新聞が紙面の三分の二を使ってトップ記事でこの事をご紹介します。

西「ここの人らは何を考えてんねん。ニコニコ共和国なんて意味ないに決まってるやん。」

電話

西「もしもし。」

朝「もしもし、ニコニコ共和国でしょうか？」

西「えっ...あっはいそうですが。」

朝「朝日新聞の者なんですけどニコニコ共和国に取材させていただきたいのですがよろしいでしょうか？」

西「あっはい、どうぞ」

電話

西「もしもし。」

毎「ニコニコ共和国の方でしょうか、毎日新聞の者ですが取材よろしいですか？」

電話

読「読売新聞ですが取材よろしいですか？」

とまさかの大盛り上がり

西「皆さん大変です、取材協力の電話が止まりません。」

A「さっすが木村さんだ、こうなる事がわかってたんだ。こりゃめでてえや、みんなで飲みましよう。」

西「飲んでる場合ちやいますよ、国の事とか大統領以外全く決まってないんですから。取材受けても全然答えられないじゃないですか。今なら洒落で済みます。この辺でやめましょう。」

A「何言うてるか、もうすぐ取材陣が来るのにそんな事したら大バッシング食らうでねえか。」

西「そうかもしれませんが、国なら官僚とか省庁とか国の骨格とか組織がないじゃないですか。どうするんですか。」

木「(お酒を飲み干し、メモを出す) 考えてきた。」

西「考えてきたってなにをですか？」

木「官僚と省庁。」

西「ちょっと見せて下さい。木村さん、新聞読んでます？1982年現在日本に省庁は24あるんです。ニコニコ共和国なんで72もあるんですか？約三倍ですよ。それで財務省とか、環境庁とかわかりますよ、なんですかエイリアンパトロール隊長って？」

A「さっすが木村さんだ、日本や地球にとどまらず全宇宙の事まで考えてる。」

西「まあとりあえず省庁はいいですよ。日本も末端まで言ったら色んな部署もありますし、それより憲法とか法律とかそんなないじゃないですか？」

木「(お酒を飲み干し、メモを出す) 考えてきた。」

西「何をです？」

木「憲法を。」

西「ちょっと楽しんできた、見せて下さい。すげえ前文まで書いてるやん、なにに『ニコニコ共和国国民はひたすら目立ちたがり、偶然のきっかけでそうなった閣僚を代表としてわれらの未来のためにパロディ精神にのっとり後宮の愛と平和と自由そして繁栄を守ることを決意し、ここに主権が国民に存する事も確認しこの憲法を確定する』ってそれなりにしっかり書いてるな。まあ前文はいいですけど、なんですかこの憲法の特に二条『大統領の地位はひたすら偶然による。偶然でなければ成り行きになる。いずれにしてもまあ、これならとうやむやのうちに閣僚全員を納得させなければならぬ』ってそんなんで大統領決めていいんですか？何六条見ろ『大統領は無給であるが、閣僚並びに国民におごることを妨げるものではない』って、、、これやったら接待し放題やないかい。汚職まみれやん。ほんで省庁の下にもう大臣とか勝手に決めてるしもはや一

族経営に近いぞ。」

A「さっすが木村さんだ。このプロジェクトが失敗したときの責任を自分でかぶろうとしている。」

西「なんでそんな発想になんねん。」

A「それじゃあ皆さん、ここはこの辺りにして、二次会スナックでも行きましょう。」

A「しかし、カラオケは楽しいだあね。」

ママ「すみません、11時なんでそろそろ閉店なんです。」

A「そういうとなんで11時に閉店するんだ？」

ママ「風営法で決まってるんです。すみません。」

木「(お酒飲み干し) ニコニコ共和国と日本には二時間時差がある。」

西「こいついきなり何いうてんねん。」

木「(お酒を飲み干し) ニコニコ共和国と日本には二時間の時差がある。」

西「時差があるってそんな訳ないじゃないですか。」

A「さっすが木村さんだ。と言う事はここはまだ九時だ。二時間歌えるぞ！」

西「この人天才かもしれん。」

ニコニコ共和国に新たなものを作り取材の電話は鳴りやみません。

西「もしもし。」

放「こちら CPI 通信です、取材よろしいですか？」

電話「Hello.This is New York Post」

と世界に話題を呼び、テレビ局まで押し寄せます。

西「テレビ局まで特集してくれるようになりました。これからはメインの夏の企画に取り組みば成功間違いないでしょう、夏のイベントを考えていきましょう。」

A「それもこれもみんなのおかげだ、とりあえず飲みましょう。」

西「いえ私は飲めないのです。」

A「そうだったね、じゃあウーロン茶ここに置いておきますね。しかしなんかあるかね？」

木「(お酒飲み干し) ヒーローショー。」

A「さっすが木村さんだ、これなら子供が喜ぶこと間違いなしだべ、他にあつか？」

木「(お酒飲み干し) 魚つかみ取り。」

A「さっすが木村さんだ、こりゃ親子でも楽しめるもんだしちょうどええだ、他にもねえか？」

西「(お酒を飲み干し) 生卵投げ大会、子豚追い込みレース、火の車競争。」

A「さっすが木村さん...といたいけど、今、西君なんか言ったか？」

西「生卵投げ大会、子豚追い込みレース、火の車競争。」

A「西君様子がおかしいがどうした？」

B「誰だ俺のウーロンハイ飲んだの？」

A「と言う事は間違って西君が飲んだのか？これはいかん、西さん大丈夫ですか。」

B「だけでも今の面白そうだ、西君生卵投げ大会ってどんなルールだ？」

西「簡単ですよ、ただただ生卵ぶつけ合って勝敗を競うだけです。」

木「(お酒を飲み干し) 面白い！」

西「木村さんわかって下さいますか？うれしいなあ。」

A「んじゃ子豚追い込みレースってどんなレースだ？」

西「放し飼いの子豚を木の板でドついてどれだけ早く小屋へ入れるかや。考えたらわかるやろ。」

A「そんなもんわかんねえ。」

木「(お酒を飲み干し) 面白い！」

西「きむっちわかってくれる。」

A「木村さんをきむっちって言うな。で火の車競争は？」

西「ヒノのトラックをどれだけ早く運転できるか。」

A「火の車競争じゃなくて、ヒノの車競争ね。」

木「(お酒を飲み干し) 面白い！」

西「さすがキムヤン！マブダチはええな。」

A「まあ木村さんが面白い言うならやってみるか。」

と有言実行すべてやってしまいます。

無茶な企画もありましたがこれがさらに話題を呼び夏、沢山お客さんがニコニコ共和国に押し寄せます。

A「皆さん乾杯！夏は大盛況でしたな。お酒がうまいなあ。西さんは関西戻って木村さんは奥さんに飲みすぎを注意されてお休みだそうです。」

B「そうですか、二人がいなくても冬はなんとか私達だけでなんとかイベントに取り組んでいきましょう。」

西「ニコニコ共和国久しぶりだな、俺がいたときは夏やったけど冬はさすがに冷えるわ。久しぶりに観光協会の事務室きたけど変わってないな。あっ電話、もしもしニコニコ共和国です、えっはい??」



西「ちょっと皆さん大変です。」

A「ああ～西さんお久しぶり！」

西「呑気に挨拶してる場合ちゃいますよ、日本の警察から連絡があり時差は認めない、11時以降にカラオケしてはいけない、警告を無視するようなら自衛隊の武力行使も視野に入れると連絡がありました。」

A「あれえまあ。なんで目をつけられたかね。」

西「当たり前ですよ、大体なんですかこの冬のイベント。パスポートが200コスモで売ってるのになんで密入国手引書なんて発売したんですか？またそれが300コスモって。それに今これ何してるんですか？」

A「何してるんですかって冬季オリンピック。」

西「オリンピックはいいですけど、オリンピックていうのは各国の選手が大会を勝ち抜いてくるんですよ。そのオリンピックになんですか、出場選手募集中って。流行ってないの丸わかりじゃないですか。」

A「いやけどそれだけじゃなくて、西君や木村さんが考えたのもあつから。」

西「魚つかみですよ？なんで冬にまたそれするんですか？あれは夏やから成立するんです。なんで雪がしんしんと降る寒い日に冷たい水に手をつけるんですか？魚も寒くてしんじゃいますよ。そして子豚囲い込み競争の豚ストレスに耐えかねたのかみんな脱走しちゃったそうで、酪農家の皆さんが大クレームですよ。後ヒノの車レース、本当に荷台に火つけて火の車レースにしちゃったんですか？もう消防も駆けつけて今大変なさわざですよ。とりあえず私はそちらに向かいます。」

A「行ってまわっただ。わしら村人だけではイベントはうまくいかないな、なんで西さんと木村さんはイベントに取り組むのが上手いんやろう。そうか二人とも取り組むのがうまいはず、元は相撲の行司やから。」